

# 協働学習における評価の検討 I

## —探究型学習におけるダイナミック・アセスメントからの検討—

荒巻恵子\*1

Email: aramaki@main.teikyo-u.ac.jp

\*1: 帝京大学大学院教職研究科

◎Key Words 探究型学習, カリキュラム・マネジメント, ダイナミック・アセスメント

### 1. 問題と目的

問題発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習などの方法論が取り上げられるアクティブ・ラーニングにおいて、Fink<sup>(1)</sup>は、ラーニングポートフォリオやジャーナル(学習日誌)を通じた省察を強調し、自己評価による省察がアクティブ・ラーニングにおける能動的学習を促し、自律型学習者を形成するとし、その評価について「拡張評価モデル」を提唱している。荒巻<sup>(2)</sup>はディベート学習の実践事例から自己評価による省察が、学習者自身の行動に働きかける自律型学習者を形成することを明らかにした。一方で、協働学習における自己評価や他者評価においては、個人間差や個人内差への課題が指摘され、グループ評価への難しさも指摘している。協働学習における自己評価やグループ評価を考えたとき、個人間差や個人内差について配慮する必要があり、ひとつの評価だけでは、評価するには限界がある。

一方で、問題発見・問題解決を学習目標に据えた探究型学習において、田中<sup>(3)</sup>は予想・活動・結果・考察といった「問題解決のサイクル」を示し、問いの発見から解決までの考え方のサイクルとして実践授業の中で示している。ここでの問いの発見では、情報収集力や論理的思考力が必要とされ、その問いの質が問われる。従来、情報モラル教育が向き合う問題は、例えば、インターネットや携帯電話を使うとき、起こりうるネット詐欺などへの危険回避の知識や、適切な情報伝達に必要なモラル課題であった。生徒たちは、そこで予想される問題を発見したり、解決する活動に取り組んできた。そのため探究型学習における学習目標は、結局のところ、パフォーマンス(ここでは調べ学習活動、レポート作成)評価をすることにどまり、探究型学習において、本来評価すべき、学習者が何を、どれだけ、深く学べたかという目標に対して、真正に評価できていないと考える。また、西岡<sup>(4)</sup>のいうように子どもたちにとってのレリバンスを目指すところから発想された真正性の評価とならなければならない。

そこで、本研究では、協働学習における評価の在り方として、学習者の学習過程に着目した評価であるダイナミック・アセスメント理論について検討し、その有効性を探る。ここでは、探究型学習での事例研究として、英国の市民教育教材を取り上げ、自己評価とグループ評価についてチェックリストやルーブリックとアンカー作品から評価基準を検討する。

### 2. ダイナミック・アセスメントの検討

荒巻<sup>(5)</sup>によれば、ダイナミック・アセスメントは、ヴィゴツキーの「行動の文化的発達」理論に基づいた「学習者の学習過程に焦点をおき、学習者の学習潜在性を測ることを目的とする評価のパラダイム」である。Vygotsky, L<sup>(6)</sup>は行動の文化的発達が高次の精神機能の発達を促進し、人間の行動をさらに発展させ、構成させる社会構成主義に基づいた、評価理論としてダイナミック・アセスメントを提唱している。ダイナミック・アセスメントは、これら学習者の変容する発達過程を継時的に捉えていく評価方法の理論であり、その後の形成的評価の方法論につながり、近年ではアクティブ・ラーニングにおける評価理論としても注目される。

### 3. 探究型学習における市民教育教材

英国では1997年5月、保守党から交代したトニー・ブレアの労働党政権は、教育改革を掲げ、市民社会(Civil Society)の社会的基盤を強化するとともに、ボランティア・セクター(Voluntary Sector)と行政とのパートナーシップの深化を国内政策の中心に据えた。その一環となる『市民教育』(Citizenship Education)は、学校教育の根幹に位置づけられた。新カリキュラム『市民学習』(Citizenship)は、2002年9月から中等教育(Secondary School)において主要必修科目7科目のひとつとして教育課程に導入され、独立した教科『市民学習』として導入された。必修カリキュラム『市民教育』は、青少年が現代の民主主義における市民としての役割と義務について十分な理解を育めるよう助力するための教育である。また、そのために必要な、道徳的、文化的、社会的、政治的な責任意識を育み、人間としての統合的な成長を促進することを目的に設定された、他の全教科の領域と連動させる“クロスカリキュラム”であることが特徴である<sup>(7)</sup>。

『市民教育』における基本的スキルは、

- ①コミュニケーション能力、
  - ②数字活用能力の習得、
  - ③IT(情報技術)の習得、
  - ④他者と協力する能力の習得、
  - ⑤自己の学習と成果を向上される能力、
  - ⑥問題解決能力の習得、
- の6つである。

英国の学校教育では数学科における統計学、プログ

ラミング学習が教育課程に組み入れられ、リフレクションによる自己評価の取り組みも行われている。

メアリー・コルソンの『信じられない「原価」買い物で世界を変えるための本①ケイタイ・パソコン』（原著“The Cost of Technology” 2014）は、英国では市民教育の教材として取り上げられる。本書は、2015年メディアリテラシー教材の児童書として、稲葉茂勝氏によって翻訳され、我が国に紹介された。本研究では、情報モラル単元の教材として、本書を取り上げる。

#### 4. 授業計画と学習目標・課題

英国における市民教育の教材を用いた、高校1年情報科の情報モラルの授業は、表1のような授業計画を作成し、学習目標を生徒たちにも示し、レポート課題を課した。

対象：高校1年男子生徒41名

授業の内容：第1回は世界16か国の国別IT産業について、個別の課題①として、一人一人がテーマを決め調べ、レポートにまとめる。第2回は国別のグループ（2名～3名）に分かれ、第1回で作成したレポートを共有し、グループの課題②としてのテーマを決め、改めて、グループとしてのレポートをまとめる。第3回は、グループで作成したレポートをクラス全体の前で発表する。他の国別グループの発表を聞いて、自己のこれまでの学習活動を振り返り、自己評価を行う。最終の課題③として、世界のIT産業の現状から見える課題を自分の考えとして、まとめる。

#### 5. パフォーマンスの振り返りと自己評価

本研究の授業は、3回行われ、学習目標をその回ごとに生徒に示した。生徒たちは、回ごとの学習目標を知り、課題を遂行した。最後に、振り返りシートによる学習過程ごとの自己評価を行った。

学習者による自己評価の個人内差、個人間差への課

題は、荒巻<sup>2)</sup>によって指摘されている。実際に、図解表現はよくできるが、記述表現は不得手であるといった課題による優位性の違いが顕れる個人内差や、ネガティブ志向とポジティブ志向の違いによって自己評価に違いが顕れる個人間差は、そのまま、グループ評価への影響を与える。そのため、より客観的に自己評価できることが自律型学習者としても必要な能力である。

#### 6. ルーブリックとアンカー作品による客観性

対象授業では3つの課題についてルーブリックを作成して、検討を行った。さらに、ルーブリックに紐づく、アンカー作品を選定し、ルーブリック評価の客観性を図った。本発表では、ルーブリックとアンカー作品による検討した結果について発表する。

#### 参考文献

- (1) Fink L.D. Creating Significant Learning Experiences: An Integrated Approach to Designing College Courses (2003).
- (2) 荒巻恵子, アクティブ・ラーニングにおける自己アセスメントの検討 - Fink の拡張評価モデルから -, 2015PC Conference 論文集 pp.235-236 (2015).
- (3) 田中耕治監修, “実践自ら考える生徒たち—総合から教科へ谷口中学校の取り組み—” 岩波映像株式会社 (2003)
- (4) 西岡加名恵: “教科と総合学習のカリキュラム設計—パフォーマンス評価をどう活かすか”, 図書文化 (2016).
- (5) 荒巻恵子, 効果測定及び評価法の個人内評価に向けた検討, 大学間連携による教員養成の高度化支援システムの構築, 一教員養成ルネッサンス・HATO プロジェクト—教員養成とプロフェッショナルディベロップメント (PD) —, 研修・交流支援部門フォーラム資料集・平成28年度年次報告書, pp34-38 (2017)
- (6) Vygotsky, L. (1978). Interaction Between Learning and Development. In Gauvain & Cole (Eds) Readings on the Development of Children. New York: Scientific. American Books. pp.34-40.
- (7) 興梠寛, イギリスの市民教育は時代の扉を開くのか, (2012)

表1 授業計画と学習目標・課題

第1週 (5/25)		第2週 (6/1)		第3週 (6/8)	
IT 機器と世界地図から 国別 IT 産業に関するレポート①		IT 機器と世界地図から 国別 IT 産業に関するレポート②		IT 産業について、国別グループで発表 国別 IT 産業に関するレポート③	
学習目標と振り返りのパフォーマンスへの自己評価					
学習目標① 1. テーマを設定できる。 2. テーマに合った内容を、文献、資料、ウェブサイトから調べることができる。 3. 参考文献の明記ができる。 4. 調べたことから、自分のなりの考えを、図解や記述でまとめることができる。		学習目標② 5. グループとしてのテーマを設定できる。 6. グループ内で各自が調べたものを共有しその国の IT 産業について、図解や記述でまとめることができる。 7. グループで協議しグループとしての考えをまとめることができる。		学習目標③ 8. グループとして、決められた時間内で発表することができる。 9. 質疑に対して真摯に受け答えができる。 10. 他者の活動から、自己の活動を振り返ることができる。	
個別ワーク	【課題①】 各自、担当する国を確認し、国別に IT 産業について、テーマを決めて、調べる。文献、資料、ウェブサイトなどで調べたことと、考察したことをワークシートにまとめ、提出する。	グループワーク	【課題②】 国別に分かれ、調べた内容を共有する。発表に向けて、担当する国の IT 産業に関して、グループとしてのテーマを決め、発表のための資料をまとめる。考察したことも含め、ワークシートにまとめ、提出する。	グループワーク	【課題③】 国別にグループごと発表する。発表は、代表者が行い、質疑応答は全員が参加する。振り返りシート提出する。